

霸權？テクノロジー？ 「英語一強」の世界はどうなる

島田雅彦

(作家)

一九八〇年代前半、外国語大学のロシア語学科在学中に「サヨク」「青二才」を標榜して文壇に登場した作家、島田雅彦は、その後、ニューヨークやベネチアにも暮らし、世界中の作家、詩人、劇作家たちと交流を深めてきた。深く深く日本語と英語などの外國語の関係を洞察してきたその眼から見える現在を訊く。

現在の世界では、「グローバル化」の名の下で米国が霸權を拡大するのと歩調を合わせるよう

に、言語においても「英語一強」の様相が一段と鮮明になってきています。

たとえば、大学の教員募集でも英語関連の募集が圧倒的に多く、英語でおこなう授業のコマ数がその大学のステータス評価の基準にもなっています。また、文学の世界でも、日本は「翻訳大国」といわれるほど欧米各国の作品を日本語に翻訳して出版してきましたが、ここ最近は出版される翻訳文学のおよそ九割が英米の作家が書いたものといわれています。そして、わたしは東京外国语大学の出身で、ここ卒業生には外交官になる人が少なくないのですが、外務省も現在では北米局を中心としたアメリカ・スクールが圧倒的に幅を利かせています。

外務省には、担当地域の言語ごとにロシア・

英語の文法は意外と緩い

スクール、チャイナ・スクールなどの語学闇が存在していて、かつてはそれが力を持つていましたが、現在ではそういった多様性は失われて英語闇の専横状態になっていると聞きます。たとえば、外務省を通じて日本の政府がロシアと交渉する場合、かつてはロシア・スクールの外交官たちが下準備からイニシアチブを握って進めましたが、現在はアメリカ・スクールの意向が強く反映される傾向にあるようです。

「外務省の多様性が失われた」といいましたが、それは先に述べた大学や翻訳出版界でも同様です。わたしの通っていた頃の東京外国语大学は特に「英語中心主義」を嫌う性格が強くあります。ロシア語・スペイン語・中国語学科が威張つて印象がありますが、現在では英語偏重の波に押されていることが容易に想像できます。

と考へるはずです。つまり、おカネ。実際に英語がグローバル言語として認知される過程では、米国の通貨であるドルが世界の基軸通貨としての地位を確立していったのです。また、金融や情報通信などの産業でも、世界は米国を中心にして動くようになりました。こういった「おカネ」の力が、英語偏重の背景にあるのです。

しかし現在、米国の霸權を脅かす新たな勢力が台頭してきています。

そう、中国です。特にインターネットの世界では、次世代の通信システムとなる5Gを巡る米国と中国の主導権争いが熾烈で、米国の要請によってカナダ当局が中国系企業「ファーウェイ」の副会長を逮捕した一件も米国サイドの危機感が如実に表れたものといえるでしょう。

また、ネット通販の世界でも中国系通販サイト「アリババ」が人民元による決済を全世界で急速に拡大しているし、中国政府が掲げる新経済圏「一带一路」でも、決済通貨としての人民元のプレゼンスが拡大していくことは間違ひありません。

米国と中国の霸權争いの行方について、文学



者であるわたしは予測をコメントする立場にありませんが、仮にこの戦いで中国が最終的に勝利を収めたとして、中国語が英語に代るグローバル言語になるのでしょうか？「英語が話せれば高収入が得られる」と考え、高額の費用を投資してまで勉強する日本人は、一〇年後、あ

りませんが、仮にこの戦いで中国が最終的に勝利を収めたとして、中国語が英語に代るグローバル言語になるのでしょうか？「英語が話せれば高収入が得られる」と考え、高額の費用を投資してまで勉強する日本人は、一〇年後、あ

りませんが、仮にこの戦いで中国が最終的に勝利を収めたとして、中国語が英語に代るグローバル言語になるのでしょうか？「英語が話せれば高収入が得られる」と考え、高額の費用を投資してまで勉強する日本人は、一〇年後、あ

りませんが、仮にこの戦いで中国が最終的に勝利を収めたとして、中国語が英語に代るグローバル言語になるのでしょうか？「英語が話せれば高収入が得られる」と考え、高額の費用を投資してまで勉強する日本人は、一〇年後、あ

りませんが、仮にこの戦いで中国が最終的に勝利を収めたとして、中国語が英語に代るグローバル言語になるのでしょうか？「英語が話せれば高収入が得られる」と考え、高額の費用を投資してまで勉強する日本人は、一〇年後、あ